

# 四季

高野 桜

—  
買い物を終えた帰り道のことだった。

「おい、ここにオカマいるぞ！」

中学生だろうか。下校時の男子生徒達が声を張り上げ、あざ笑っていた。

こちらを見ながら笑う様に、その言葉は私投げられたものだと確信した。

子供は嫌いだ。

私は拳を堅く握りしめた。

「あはは！ おっさん、おっさんだ」

周囲に憚(はばか)ることなく叩きつけられる言葉。

私だってこんな顔に生まれたくて生まれたんじゃない——その言葉は鋭いナイフのごとくだった。

ゴリラみたい。

親父顔。

学生時代の苦い思い出が脳裏をよぎった。

何度も何度も私の心のカーテンを切り刻んでいく。

母からお使いを頼まれたら行くしかない。

行けない理由なんていったら両親が悲しむことは目に見えている。

遺伝だからと母は自分を責めるに違いない。

だけど。

外は嫌い——私は一目散に駆けだした。

いつごろからだろうか。外を出歩くことも怖くなっていた。

学校もろくにいけず、部屋に閉じこもってばかりいた。人に見られたくない。それで昼と夜が逆転した生活をずっと送ってきた。

そんな私は夜、こっそりと出かける場所があった。

今日も私はその場所に足を運んだ。

春になると桜が満開になる、川沿いの小道を独り歩く。

空を見上げると無数の星が輝きを放ち、澄み切った空気が星の明るさを際立たせていた。

耳を済ます。

水の音。

とても心地良い音色。

それは嫌なこと全てを忘れさせてくれるようだった。

立ちどまり、視線を移す。

黒い無骨な木が目に入る。

鮮やかなピンクは影をひそめ、葉の緑に覆われた木。

ちょっと悲しくなった。

幹に触れてみる。

ゴツゴツとしている——まるで私みたいね。

思わず苦笑が漏れた。

そのときだった。

「君、そんな所でどうしたの？」

やばい！ 人だ！

こんな時間、誰もここには来ないと思ったのに！

私は思わずうつむいた。

「大丈夫か？」

男性の声だった。

男性はこちらの心配をよそに近づいてきた。

来ないで！ お願い！

私は心の中で叫んだ。

もう——嫌！

「気分でも悪いの？」

私はうつむいたまま顔を振った。

暫く沈黙が続く。

周囲を支配するのは、さらさらと流れる川の水の音だけだった。

「そっか、とにかく落ち着こうよ」

男性は興奮しきった私を気遣うように、私の肩にそっと手を置き、土手に腰を降ろした。

私は小さく頷き、顔を合わせないように男性の隣に座った。

「こんな夜更けに女の子が独りでこんなところにいるなんて心配だったから」

彼はそう呟くと照れくさそうに頭を掻いた。

「え、私！？」

思わず自分を指さしてしまった。

「他に誰がいるの？」

思わず彼の顔を見つめてしまった。

黒い髪がさらさらと風を受けていた。

シャンプーの良い香りが鼻につく。

月明かりに照らされた彼の顔立ちは、芸能人と見間違ふほど美しかった。

私は醜いほどの男顔なのに、美形な男の人からそんなこと言われるなんて——耳まで熱で真っ赤になっているのが自分でもわかった。

「私なんか——」

彼はにっこり微笑むと、私の口元に人差し指を添えた。

「馬鹿だな君は。人は顔なんかで判断できるか」

私は目をまんまるにしながら彼の瞳を覗き込んでいた。

まるで足元に流れる川の水のように澄んだ瞳。

私は思わず吸い込まれそうになっていた。

「君はとっても素敵な女性だよ。まるで、そう——」

彼は視線を私から下に移す。

「——川を流れる水のように綺麗だよ」

私の心を覆い尽くす黒いガラスの壁が、音を立てて崩れ落ちていった。

「あ、あ——」

声が出るよりも先に涙が溢れていた。

「また、会ってくれる？」

立ち上がり様に呟く彼に向かって、こくり、こくりと頷くのが精いっぱいだった。

「じゃ、またここでね」

少々はにかんだ笑みを向け、彼は去っていった。

止めどもなく流れ落ちる涙。

この世の中に四季はあっても、私なんかに春はありっこないって思っていた。

寒さに閉ざされた冬だけのはずだった。

「春ってあるんだね」

私は溢れる涙を指で払いながら小さく呟いた。

そして数年後。

私と彼はめでたく結婚することができました。

周囲からみたら、なんであいつがこんな女なんかと、そう思うかもしれない。

でも、彼と誓ったから。

どんなに四季が巡ろうとも、例え凍えるような冬になろうとも、二人で歩いていくと。

乗り越えていこうと。

いつまでも、いつまでも二人で——そう誓ったから。

——E N D——